

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	言語発達と社会性 : 辞の発達にみられる社会性の内容
Author(s)	和田野, 啓子
Citation	児童の言語生態研究 , 6 : 36 - 40
Issue Date	1973-11-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045070
Right	
Relation	



言語発達と社会性

辞の発達にみられる社会性の内容

和田野啓子

児童の言語生態研究Ⅱで、上原輝男氏が、「どうするって、どうすること——鈴木・ビネー式知能検査のある問題と子どもの構えについて」の論を、幼稚園児一〇〇名への調査をもとに書かれた。ここでは、調査をさらに、一年生、二年生へと進め、社会性の発達を中心にみていった。調査は、一年生 町田第二小学校九一名、二年生 新宿四谷第一小学校四六名である。

児童の言語生態研究Ⅱで、上原輝男氏は、子どもの回答を、その視点および構え方によって整理、分類され、その結果から「能力測定は、解答の正否によるのではなく、その回答の取るコース・タイプ・設問に対する構え方をみることによる方が、知能的であり、子どもの頭脳から離れない」と述べられている。たとえば「わからない」という回答は否になってしまうのだが、これは、考えの深まりゆえの「わからない」であって、単純に正答をする子よりも考えていることは多様なのだというのである。つまり、回答の結果的選別でなく、回答への過程的筋道を見ていかなければならないのである。それは、言語主体の主観に属する判断情緒、欲求等に限られる辞（助詞、助動詞、接尾辞等）

に主にみられるのである。

(一)について

質問に対して、非を認める型と非を償う型が顕著に表われるが、このいずれを取るかということと、社会性との関係は、ほとんどないのである。回答に到るまでの過程をみていくと、次のようなことがわかる。

是非を認める型	幼	一	二
ごめんなさいって	57%	26%	17%
ごめんなさいと	0	12%	5.9%
ごめんなさいを	2.3%	3.4%	5.9%

「——って」は規範を習得したのちにそれに合わせることを習慣づけられている言い方、「——と」は選択のあとの自己判断、「——を」は、対象意識をしめしていると思われる。

この「——を」を使えるということは自己と他との分離が始まりつつあると言えないだろうか。

彼我関係をとらえていると思われるものに動詞「あげる」がある。このことは幼稚園児には見られなかった。

1. べんしょうしたあはる：かねもってるから
。なおしてあげる。

。ごめんなさいってゆってから、エートネ
アンソネー、べんしょうしたあげる（一年）

。：：同じもの買ってあげてかえす（二年）
2. ウイントネエーすきなものをあげる

。おかねーやね ウイント ほし ほしがっている
ものをねエー、ウーン、あげる（一年）

これらの「あげる」には陳謝の意がどのくらい含まれているのだろうか。この子たちは「あげる」という立場と逆の立場にいるのではないだろうか。そのことがわかっているのだろうか。だが、この子たちにおいても、回答までに間があったり、「エートネー」「ウイントネー」などを伴って回答しており、迷いの中での選択なのである。

さらに他人の気持ちを考えている回答がある。
。ウーン：：かわいそうだと思ふなァ（一年）

この子は人の物をこわしてしまった時に、自分がどうするかよりも、自分の失敗によってひき起されるところの相手の感情を考えている。「だ」は「判断的陳

述」であり、さらに「なア」には自主的なものが伺える。この回答は、質問の後にすぐに出てきたものではない。いろいろ考えた結果、この回答がでてきたのだろう。

次に、自分の立場を明らかにし、相手の態度を述べているのがある。

。おこらエる(一年)

自分を客観視し、受身のとらえ方をしている。

一年生になると、他人に対して自分の情意を示す語

(形容詞、形容動詞、副詞)がふえている。

。：エートネーすなおにごめんなさいって言う。

。あの、ちゃん。とあやまる

。フアノー：：ちゃんとね、作る(一年)

。エトー、いさぎよくあやまります

。ウンネー 正直にあやまります(二年)

これらのことばが使えるということは、「すなおでない」

「：：でない」場合をも知っているのではないだろう

ろうか。二元の捉え方ができているのではないだろう

か。自分が相手に対して落ち度があるから、相手に

「すなおに」「ちゃんと」あやまろうという心の動き

が読みとれる。そして、もしかしたら「すなおに」あ

やまれば、相手も許してくれるかもしれないと考えて

いるかもしれない。

今まで述べてきたものは、質問に対して一方法の回答

しかしていかないものである。一年生になると、並立

の助詞が使われるようになり、二方法を並べ、その中

から選択したりするようになり、列挙の意識が生まれ

てくる。これは、幼稚園児と決定的に異なる点である。

。あやまるか、私は、ウン、エート

すいませんでしたとか言ってる、あやまります(一年)

「か」「とか」の並立助詞には、こわした時に自分の

とる態度は一つではないらしいことが伺えるが、この子においては、まだ同じ行為の中の選択にしか使われていない。これが二年生になると、異った行為での選択に使われるようになる。

。あやまるか、カ、フントカ、ほかのもの 買ってか

えすか(二年)

こわした時にとる自分の態度は一つではない、決定は

できないということを表わしているのではないだろう

か。

。べんしょうしたりする(二年)

これは、さらに視点の広がりを感じる。その時に自分

のとる態度は、その時になってみないとわからないと

いうらしい。含みを残した回答である。

また、こわした時に自分のとる態度で、非を認める

型プラス非を償う型が、一年生に二人みられる。

。ごめんなさいってから、べんしょうします

。：：ごめんなさいってゆってから：：

エートネ：アノネ：べんしょうしたアげる(一年)

あやまることと、弁償することと、弁償することとは

異質のものであると促しているのだろう。

また、一年生で、一般的行動の仕方は知っていても

自分はそうはしたくないのだという葛藤の伺えるもの

がある。強い自己主張を感じる。

。ウン、べんしょうしない。(一年)

これとは少しちがうが、迷いに迷って回答しているもの

がある。

。ウン：ウン：ウン：なんにもやることがない

な(一年)

自分の選択を「な」で確認している。

(二)について

質問二は条件性の問題である。しかし非を決定して

しまつて回答する子と、条件下で回答する子にわける

ことができるが、条件下の問題であるにもかかわらず、

条件下で回答する子も、どの学年も10%内、ひじょ

うに少ない。「走る」「かける」という動作的反応を

する子が多い。また「わからない」と回答する子は一

年生が30%とどびぬけて多い。

動作的反応型で、使用数のふえているものは「いそ

ぐ」「かける」である。「いそぐ」は、「はしる」

「かける」よりも、副詞的要素が強いと思われる。幼

稚園児で「さっさと行く」、二年生で「すぐ学校へ行

く」という副詞が使われている。

幼稚園児にみられない言い方に「かけてくる」

「かけてきます」がある。一年生3%、二年生4%

の使用率である。「かけて行く」と「かけて来る」の

違いは、視点の違いではないだろうか。「行く」の方

は、自分に視点があり自分が動いていくにつれ目標物

に到達する。「来る」の方は、自分の視点は目標物に

あって目標物に向ってくる自分を客観的に見ていると

言えないだろうか。つまり視点を置きかえてものを見

ているのではないだろうか。

次に自分と他の物との関係を把握している助詞につ

いてみてみよう。

幼 一 二

学校に 3人(3%) 5人(5%) 6人(13%)

学校へ 0 4人(4%) 5人(12%)

学校まで 0 1人(1%) 0

他と自分との関係をあらわす助詞が、学年の増すにつれ増えている。自分と他とははっきり把握しようと

している。

次に自分の心の状態を述べている回答がある。

。困っちゃう。もち遅れたらかなしいよ(幼)

。こまる

。やだなーと思う

。あわてるうフツ

。おくれちゃったなーと思います(一年)

この子たちは、直接行動をとる前に、自分の情意を確めているのではないだろうか。ただ「走る」と回答する子には、単に親や教師からの一方通行的なものを感じるが、この子たちにはもっと底の深いものを感じる。子どもの心の中に、困惑、葛藤が伺えはしないだろうか。

また、幼稚園児には一人も使われていない言い方に「ーと思う」がある。これは自己判断を表わすようにとれるが、実は確定してはいけないときに使う、ほかした言い方ではないだろうか。

。やだなーと思う

。おくれちゃったなーと思う

。先生におこられると思います(一年)

。：：ちこくした場合は、かけてくるか、それとも

ちこくしてもいいと思います。(二年)

次に心の状態をあらわしているが、今までの例とすこし違うものがある。

。あぶないって言う(一年)

「遅刻するかもしれない気がついた」から「あぶない」と言うのだろう。この子は「もし遅刻したら、先生に叱られるだろう。それはいやなことだ」と思って「あぶない」って言った瞬間、学校へ向って走り出すのではないだろうか。

次に「学校を休む」というのと「学校へ行く」との

比較をみてみたい。

幼 一 二

帰る 2人(2%) 0

休む 2人(2%) 2人(2%) 0

途中で帰らないでちゃん0

と行く 1人(1%) 3人(7%)

母親と行く 0 1人(1%) 2人(4%)

学校を休むことは、遅刻することよりも重大なことに思われる。休んでしまおうか、行かなければならないのかという迷いは、学年が進むにつれ、出てくるようである。「途中でいいから」「ちゃんと」「そのまま」等のことばで、迷いの中から自分の態度を決定したと思われる。このように帰らないでちゃんと行くという意の回答が、学年の増すにつれふえているが、それと同時に、母親に依存する子もふえているのである。「幼児の社会性指導」の中で、三木氏は、「人間が形成されていく過程は、依存と独立のあい反するように見える両極の間をジグザクに進んでいくのだ」と述べているがこれかもしれない。

幼稚園児は一度家へ帰ってしまったらもう戻ってはこないが、一、二年生は戻ってくるのである。そして二年生になると、最初に考えたことも一方法であるが、もっと違う状況になることもありうると考えていると思われる回答がある。

ウツ、かけて学校へ行っちゃうけど、あんまりおくれたときにはね、もう一回もどって行く(二年)

次も二年生だけにみられる回答で、列挙している。：：ちこくした場合は、かけてくるか、それとも、ちこくしてもいいと思います(二年)

質問に対してこの子たちのとる態度は一つではない。

選択に巾の広がりを感じられる。

また二年生になるとはじめて不従順な回答がでてくる。

。

。：：ちこくした場合は、かけてくるか

それとも、ちこくしてもいいと思います。

。ウーン、堂々と入って行く(二年)

いわゆる規律に対する不従順ではあるが、何か発達しているものを感じるのである。おとなの常識から考えれば、ここに「堂々と」を使うなんておかしいと思うだろう。それとも、なんて物おじしな頼もしい子だと思っただろうか。これは遅れることに伴う卑屈感に対する排除である。この子たちは、どういう態度をとらなければならぬかは百も承知しているのではないだろうか。

最後に、幼稚園児だけに見られる回答がある。そしたら走って逃げたいじゃない

。そう思ったとき、かけ出して行って学校の時計を見ればいい

質問の仮定的条件をよく捉えてはいるが、この子たちには、困惑などひとつも見られない。まるっきり困惑のみられない回答があったのは、幼稚園児だけである。

(三)について

質問三は、「質問内容が(一)、(二)問以上に行動よりも態度を求めており、しかもその態度が相手の心証との関係を呼ぶことも加わることだけにこの回答はでにくい」と上原輝男氏は述べられている。とすると、ますます「わからない」と答えることもこの場合、質問を了解していることになるといわれるのである。

第一問からの「わからない」の回答率をあげてみよう。

幼 一 二

第一問 3.5% 2%

第二問 5% 30% 7%

第三問 22% 32% 13%

一年生で急に増えた「わからない」が二年生になる
とまた急に減ってくる。もはやどうしたらいいのかとい
う心の迷いがなくなってしまうわけではないと思う。
迷いはあるが、迷いの中で選択して自己の態度を決定
しているのではないだろうか。

第三問で、「わからない」という回答が、二年生に
なって急に減っているが、一方急に増えているものが
ある。それは「ぶつ」「おかえしする」の類の直接的
回答である。直接的回答は、設問の性質から減ると上
原輝男氏は述べられているが、二年生では逆に増えてい
る。二年生に面白い現象がみられる。

適応回答 わからない 直接回答 謝罪強要

幼	14%	22	34	6
一	40	32	23	3
二	19	13	53	9

普通考えることは、二年生になればさらに一年生の
上を行くのではないかということである。しかし、こ
の二年生の結果は「ぶつ」「ふみかえす」などの直接
回答、謝罪強要型がふえ、適応回答が減っているの
である。青木誠四郎氏による「けんかの原因の年齢的変
化」を見ると、四年生になってもまだ、身体的攻撃が
原因でけんかになることが30%もあるから、二年生で
「ぶつ」「おかえしする」ということがまだまだあっ
てもよいと思われる。また、牧下、阪上氏による、あ
る道徳発達に関する調査では、発達曲線に二年生と五
年生で異常がみられるが、それは見かけ上での低い発
達であって、意識の内容が質的に内容においてより高

い方向への発達を遂げつつある時期だといっているのである。
二年生が、一番自由なのかもしれない。
では、回答に到るまでの過程を見ていきたい。まず
質問一でも述べたが「——と」「——と」の助詞

の使用率である。幼稚園児は「——と」は一人も使っ
ていない。「——と」のみである。一年生になると
「——と」三人使っており、二年生も三人である。
「ぶつ」「おかえしする」などの直接回答をしてい
ても、一年生になると迷ったあげくの選択という回答
が目につく。

。：ウオン：：おこるねエ
。：ウオン：：ウオン：：（やっ）ばりねエ
おこる
。ウーン、ウントネ：：エートネ、スーッ
やめろって言うか
。フーン：：ぼくね ぼく（は）ごめんねって言うか
もしれない（一年）

相手の立場を考えると単純に自分の態度を決定できな
いのではないだろうか。「おこるねエ」の「ねエ」に
は迷いのあとの決定を、さらに自分に念を押ししてい
ると思われるし、規範をのりこえた自己決定がよみとれ
はしないだろうか。前の二例は態度を決定しているが、
後の二例は、はっきりした決定はしかねている。
「やめろって言うか」の「か」自分と相手との間での
迷いや感いをごめた感情を表わしている。

相手の気持ちを思って態度決定できないでいるのだ
が、さらにその時にとる態度は一つではないという含
みをもった言い方が、二年生にでてくる。視点の広
りを感じる。
。おこってふみかえすときもある
。：ふんだ人に、少しおこるかもしれません（二年）

一・二年生では、自分の態度を述べなさいと問われ
ているのに、自分の感情を述べているのがある。
。にっこらしい
。いやな気分がします（一年）
。：：いたいと思うの（二年）

この子たちは質問の意を「どう思いますか」に解して
いると思われるが、何か屈折しているものを感じる。
次に相手の情意を知らなくては自分の態度も決定で
きないから、相手の情意をまず知ろうという回答があ
る。幼稚園児は「どうして——の」という言い方しか
しないが、一年生になると「どうして——か」という
言い方になる。

。シーッどうしてふんだのかって言う
。：：私はね、もうねエ、ふまないかね
さきの（一年）
。なんでやったか聞く（二年）

質問三で問題となった、子どもにとって「許す」と
はどういうことなのか見ていきたい。
△許容型Vの「ゆるしてあげる」が幼稚園児4%、一
年生24%、二年生15%である。これは、相手にしてや
るという意がこめられている。相手から、自分にして
もらわなくては許せないという気持ちのこめられた言
い方は、「あやまってもらう」（幼二・二年）、さらに
強い態度の「あやませる」（一年二人）そして命令
している「あやまらせて言う」（二年一人）である。

次は、条件付き許容である。幼稚園児は
。その子をごめんなさいっていったらね、ウント：：
。おともだちをごめんなさいっていったら、そんなに
言わないでもいいですよって言う
。あっちからあやまるから、こっちもあやまる
。泣かないから。そしたらあっちの方が、ゴメンナサ

。いつていわなくちゃいけないね。

それで許してあげるんだ (4%)

最後の例などは「我慢するから、それに応える式である。「あげるんだ」で納得しようとしているあたりなどは、理性と感情の葛藤がはやり起きている」と上原輝男氏は述べられている。

。ゆるしてあげる、ごめんなさいゆったら、ごめんなさいと言ったらゆるします

。ウん：：そのお友達がごめんなさいゆったら、私もあやまります。

。ウント、もしかね、お友達がごめんなさいゆったらね、ゆるしてあげる

。ウントネーエ、あやまったときにはね、エッ、ゆるしてあげる

。ンー、ントー、ごめん、ごめんねと言っていると、むこうが、ごめんねと言った、言ったら、あたしもいいって言います (5.5%)

条件付の許容は、一年生で増々、増えている。

「ときには」という表現がでている。

。ごめんねと言え、許します

。相手があやまったら：：ウントー、ゆるしてあげる

。あやまればいい (6.5%)

二年生では「したら」のかわりに「ば」が増えている。条件付き許容は、学年が増すにつれ増えている。この年代の子どもは、無条件で許すことはできないようである。相手が「あやまれば」許してあげるけど、あやまらなければ嫌だというのだろう。

今までの条件付き許容とは少し違う許容がある。

。イイヨ、チョットクラ、いっていいっちゃおうかな

(幼稚園児)

。ついやったから、いいって言う(一年)

。すこしならゆるしてあげます(一年)

。それぐらいならゆるしてあげます(一年)

この四回答は相手の気持ちに汲んだ言い方ではないだろう。人の足をわざとふんだわけではないし、痛かったけど、ちょっとだものがまんしようという気持ちがある。「一なら」は、足をふまれた時の程度での妥協である。他を考えてから、屈折して、そして、自分の態度を選択決定しているのではないだろうか。前年の条件付き許容とは、随分と違う。内面に深みのある回答ではないだろうか。

最後に△よそおい型Vをみてみたい。

。何も言わない

。どうもいわないよ(幼稚園児)

。何も言いません

。何んとも言いません(一年)

上原輝男氏はこれを「一度屈折された何かである」と見られている。いろいろ考えた末の屈折した回答である。

「も」に、このくらいの子には気の毒な程の自己抑制があると言えるだろう。

迷いのひとつも感じられない回答は、幼稚園児

「一きまってるじゃない」にだけ見られた。

以上みてきて、社会性というものを、行動結果から判断しがちであるが、それは誤りであることがわかった。社会性のある行動をとるに到るまでの、その過程が、構えが問題なのである。そしてそれは、辞をみていくことによって、明らかになるのである。子どもにとって社会性とは、まず、感情制御であると思われる。

(東京・端光小・教諭)

相模原市清新小学校前

山本文房具店

電話 相模原72-2841番

相模原市橋本6-26-5

文成堂書店

TEL (72) 1958